

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 寺 寫 裕 登

論 文 題 目

The effects of collectivism on uncertainty threat perception and management

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 石井秀宗

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 五十嵐祐

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本研究は、対人関係における不確実性に焦点をあて、不確実性脅威となる不確実性の種類や、不確実に関する対処方略に対して、集団主義文化が与える影響について検討することを目的とした。研究 1 および 2 では、集団主義的な個人においては、関係性に関する不確実性（関係不確実性）が不確実性脅威になること、研究 3 では、対人関係上の義務が、関係不確実性を管理する機能を持つことを明らかにした。

第 1 章では、不確実性脅威を含む、複数の心理的な脅威の理論と先行研究をレビューし、それらに対して個人主義・集団主義が一貫して影響をもっていることを示した。具体的には、個人主義的な個人が、他者から独立した自己に関するネガティブな情報を心理的な脅威として認知する傾向があるのに対して、集団主義的な個人は自己を取り巻く関係性に関するネガティブな情報を心理的な脅威として認知する傾向があることが明らかとなった。

第 2 章は、研究 1 の報告であり、日本人において、関係不確実性が不確実性脅威となり、補償的な不確実性低減のための集団同一化を引き起こすことを示した。他者から切り離された、独立した自己に関する不確実性（独立的自己不確実性）と自己を取り巻く関係性に関する不確実性（関係不確実性）という 2 種類の不確実性が、不確実性低減のための防衛的反応の指標に及ぼす効果を比較し、関係不確実性こそが、防衛的反応を引き起こすことを示した。

第 3 章は、研究 2 についてであり、関係不確実性の効果が、個人主義・集団主義に関する個人の文化的志向性から生じていることを実証するため、文化的プライミングを利用した実験の結果報告であった。実験では、集団主義プライミングを呈示した後、関係不確実性を操作し、最後に、不確実性脅威後の補償的な目標追求を測定した。実験の結果、集団主義プライミングが呈示された参加者が関係不確実性について考えた場合のみ、不確実性脅威を低減するための補償的な目標追及が生じることが示された。個人主義プライミング条件の参加者は、関係不確実性が喚起されても、防衛的反応を示さなかった。

第 4 章は、研究 3 の実験結果の報告であった。この実験では、はじめに不確実性脅威を喚起し、次に、義務が遵守される、あるいは、違反されるシナリオを呈示した。参加者にはそのシナリオに対する感情的な評価を行なうように求め、それらを従属変数とした。分析の結果、交互作用が認められ、不確実性脅威が喚起されている条件の参加者の方が、より義務が遵守されるか、違反されるかに対して敏感に反応することが示された。

第 5 章は全体考察であり、本研究で明らかになった点についてまとめ、文化の存在

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

が、個人の不確実性低減にどのような意味をもつのかについて議論した。本論文の各研究が示唆するように、文化が規範や制度を形作り、同時に、個人に内在化されるということから、文化がある程度安定していることが、個人の不確実性管理において重要となっている可能性が存在すると結論づけた。

以上、本研究は対人関係における不確実性を多角的に、文化的な視点に用いて体系的に検討を進めており、対人関係に関する研究の中では重要な位置づけにあると思われる。特に、本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべき点は次の通りである。

第一に、本研究で独創的として評価できることは、対人関係における脅威を、個人主義・集団主義の枠組みを検討したことである。具体的に、個人主義的な個人が、他者から独立した自己に関するネガティブな情報を心理的な脅威として認知する傾向があるのに対して、集団主義的な個人は自己を取り巻く関係性に関するネガティブな情報を心理的な脅威として認知する傾向があることを明らかにしている。

第二に、本研究で用いられている実験的手法は、綿密に計画されており、範囲外変数の影響を的確に統制していることにより、その結果は高い信頼性によって特徴づけられるといえる。

第三に、対人不確実性は文化普遍的な概念であるという、これまでの見解について疑問を呈し、文化によっては、対人不確実性を同じように認識しないことにより、異文化コミュニケーションの際に認識のズレが生じ、ミスコミュニケーションの原因になる可能性を示唆している。

第四に、日本人の義務感に着目し、その特質が対人不確実性管理における役割を追究することにより、時代錯誤となりつつある「日本人論」に新たな側面を与えたといえる。

これらの学術的貢献がある一方で、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 本研究で用いられた分析の一部で、不適切な統計的検定があった。
- 2) 有意水準の基準が研究の一部で緩やかであり、一貫した基準が用いられていなかった。
- 3) 文化を取り扱っている研究であるにもかかわらず、本研究で意図されている「文化」の明確な概念定義がされていない。
- 4) 本研究がメインとする関係不確実性の概念は、単なる評価懸念ではないか。

論文審査の結果の要旨

- 5) 不確実性の対処としての文化的世界観防衛と集団主義的世界観防衛ではないかの疑問
- 6) パーソナリティなど、個人的な特性と不確実性管理の関係性が十分に検討されていない
- 7) 文化的プライミングを普通の日本人に実施しているが、そもそも日本人ならばプライミングを必要としていないのでは

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と地検を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。